

『保元・平治物語』における課題

著者	中村 慎
雑誌名	日本文学誌要
巻	2
ページ	23-31
発行年	1959-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10114/00018960

『保元・平治物語』における課題

中 村 慎

『保元物語』『平治物語』の二つは、同一著作者の手によって成ったものだろうという考え方が、今日定説のようになっている。

『保元・平治・平家』の三作品の著作年代が、文献学的に明確にされていない現在、ある面では止むを得ない点もあるだろう。そして、なるほど、『保元・平治』の構成は、かなり共通したものを持ち、後にふれるが、乱のとらえ方の姿勢にも共通したのが見られる。『物語』が三巻から成ることも、上巻では乱の動機、中巻が戦いの場が中心になり、下巻に至ってその各々の結末が描かれる、という組立て方は、まったくよく似ている構成と言わねばならない。更に『物語』に描かれる英雄が、『保元』では「為朝」であり『平治』では「義平」であって、それぞれの人間に主力が注がれている人物の設定にも共通した点が認められる。

最近、『文学』二十五卷三号で高橋貞一氏が、『古本保元・平治

物語の作者と著作年代」について、描写の類似例を数多く指摘され、同一作者の考えを掲げられており、また、永積安明氏が、『中世文学の展望』の中で、二つの物語が「量的なちがいであっても、質的な転化をとげるほどではもちろんない」と言われ、これ等はいずれも大切な考えと言わねばならない。

私は本論で、この問題を中心の課題とするが、同一作者の問題を根底から否定するだけの文献学的な用意はない。けれども、『保元物語』『平治物語』それぞれの中には、かなり異質な面を認めるとし、『保元』から『平治』への発展を否定し得ないものを感じるのであって、もしかりに、作者が同じだとしても、二つの物語の中には、かなりな質のちがいがあるということを述べたいと思う。そしてどちらが先にせよ、ほとんど同時代に形成された二つの物語の作者が、果してそれだけの発展ができたかどうか、その可能性に疑問を抱くのである。

保元の乱、平治の乱の中心問題は、それぞれの『物語』の上巻に見ることができる。そしてこの問題は、単に院政と朝廷、貴族間の争いと言い切れるほど、割り切れるものではない。それは、作者のとらえ方の中にも、

「頗る笑壺に入らせ給ひて」——保元

「囁き申す方もありて」——保元

「如何なる天魔か入り替り」——平治

などの中に、それが乱の要因に関連するものだけに、作者の態度と、問題の複雑性を示している。

保元の乱では、「鳥羽上皇」「新院」「後白河」「藤原忠通」「頼長」などが中心になって問題が作られる。「鳥羽上皇崩御」を機として、「新院・頼長」対「後白河・忠通」の対立は表面化する。そして武力的背景として、「為義父子」が前者に、「義朝・清盛」が後者に加わり、根本は皇位継承にからむ勢力争いとして描かれている。つまり、天皇にせよ、貴族にせよ、絶えず勢力と権力に近づくことを欲して、自らの勢力を、確保伸長させるためのものであったということ、そして、それほど当時の社会が、動揺していたのだということが考えられるのである。

次で考察するが、『平治物語』には、先ず一つの主張が見られて、これは『保元』から『平治』への発展の一つだが、この主張は作者の、作品全体に対する構成、物の見方、考え方を決定している。ここで武力を明確に認めている作者の態度は、人物の設定とその形象にも及ばざるを得ない。

乱の中心人物、「信頼」や「信西」についても、また、その最後についても、批判的である。「文にあらず武にあらず、能もなく芸

もなく、只朝恩にのみ誇り」という、「信頼」に対するそれなどは、『保元』の「頼長」に示されたものなどとは大きな差がある。ただし、平治の乱の問題も、表面的にはやはり、貴族間の対立、権力に対する激しい欲求が、中心問題だとされている。けれども既に武力を認める作者の態度は、武士をかなり表面におし出しているのであって、その間に歴史の流れを強く感じることができるのである。

と言うのは、保元の乱では、皇位継承問題と貴族間の対立が、乱の主要な条件であった。しかし平治の乱では、院政をめぐる貴族間の葛藤と、加えて、武士がその問題の中核に近づいてきていることである。『保元』では背景としての存在、利用される武士が、『平治』では、その表面に立つのである。もちろん『保元』でも、一度戦いが始まると、武士がまったく表面化するのであるが、それによる自信は平治の乱では、中心的な位置に登場する。保元の乱で、賞に不満の「義朝」、老体にムチ打って戦いにかける「為義」、平治の乱の最初からの「義朝」と「清盛」の対立など、上昇期にある当然な武士の姿を示し、中世武士像の側面をも示している。『平治物語』初段の主張は、こうした武士の抬頭を有力に示している。

ここではしないが、両乱の中心問題を抽出すると、それは、とりもなおさず、院政の成立からんでの皇室内部の対立であり、加えて貴族間の勢力争いという、避け難い問題であった。即ち、もはや個人の力などではどうにもならない時代の流れ、つまり古代的政治の立て直しであった院政が、既に古代的社会体制を維持し得ない時代であったのであり、結局は古代社会の崩壊なのであった。そして武士の抬頭は、古代社会を崩壊する強力な力となって、背景的存在

から、中心へ、更に新しい中世的社会の形成へと、それまでの中心的階級であった朝廷や貴族の敵としての性格を示し、従ってまさに、保元・平治の乱は古代の終焉を示す、最後の戦いであったと言えるだろう。だから、結果的に、院政がその内部に武力的背景を有したことが、実は中世萌芽の要素を自身の内に有していたということになるのである。そして何よりもまず、物語自身が、こうした対立や戦いが、結果的に古代政治自体の矛盾であったということ、を、そのとらえ方の複雑さの中に明らかにしているのである。

二つの「物語」はどちらも、敗者の側から、つまり『保元』では、『頼長・為義・為朝』側から、『平治』では、『信頼・義朝・義平』の側から、とらえられているのである。このことは大変興味のある問題であり、歴史的にながめた時、院政という古代末期政治形体に挑戦する形をとる敗者の立場から、『物語』が作られているのである。だから、結果的には、古代の崩壊を担う側から描く作者は、その立場がひじょうに明確にされる。権力にも近づけなかった没落貴族の一員だったのであると言い得る。このことは作者の姿勢と性格を知ろうえに大変大切なことである。

後述するが、もし『保元』の「頼長」や「新院」や「義朝」が、結末が否定的にされたり、詠嘆が示されることに一貫性がないというならば、それはとりもなおさず、作者自身の内面的な矛盾であり、古代的な面を有していたということにほかならない。そして乱の問題についても、古代社会の矛盾を明確にせず、それどころか皇位継承を乱の要因の一つとすることで、これ等矛盾を、儒教的或は仏教的思想によって統一しようとし、破壊の姿を支えていく傾向を示しているのである。このことは『保元』により強いと言える。そ

して同時に、このことについては、この期の文学、とりわけ作者についての限界を示していると考えなくてはならないだろう。

二

『保元』の書き出しは、

中頃帝王ましましき。御名をば鳥羽禪定法皇とぞ申す。天照大神四十六世の御末、神武天皇より七十四代にあたり給へる帝なり。

となっており、仮名交りの記録体により、先ず皇室の系譜を説き出すことから始まっている。皇室内部の対立を乱の問題とする作者の態度から、その必要性はあったにしても、やはり、『大鏡』以来の形式を真似たものと考えられる。『将門記』が将門の系譜を語ることから始まるのと同様なものと考えることができよう。

そこで、『平治物語』のそれを見るなら、『保元』と異なり、昔より今に至るまで王者の人臣を賞するに、和漢两国をとぶらふに、文武の二道を先とす。——以下、それ末代の流れに及んで、人奢つては朝威を蔑如にし、民猛くしては野心をさしはさむ、よく用意あるべきか。尤も抽賞せらるべき者は勇敢の輩なり。

として、明らかに武士の力を認めることから出発して、「文を左にし、武を右に」することが「国土を治むる」唯一の道であるとされている。

このことは、『平治』における一つの発展と考えてよく、『保元』の系譜の説明から脱して、作者の明確な社会観、社会批判として述べられているのである。このように社会に対する主張が冒頭に

行われることは、如何にこの時代に、武力が認められていたかを示すのであり、権門貴族を中心とする古代末期社会体制が武力によって変えられていく過程が、人々の期待を集めていたことが理解できるのである。

後述するつもりだが、このような主張や批判は、『平治』の場合随所に見ることができて、『保元』からの飛躍と考えることができよう。例えば、最初の主張に照応して、信賴への人物評、「光頼卿参内の段」におけるそれ、頼れない人の心の動きについての考え、或は戦いの場における「京童」や「在地の者」の設定とそのことば、などに見られる。そしてこれ等の人物やことばを設定するのも、初段の主張に関連して、著しい『保元』から『平治』への構成上に見られる作者の発展と言わねばならない。

そして、こうした主張から考えられるように、『平治物語』の性格は、武士の活躍がその中心となり、その活躍に共感的な態度を寄せ、しかもそれが結果的には敗北者の側から、即ち、古代的なものを破壊していく側から描くことに統一されているのである。

敗北者の側から『物語』がとらえられている、ということは『保元』の場合も同じであると言える。けれども、『新院』や『左大臣頼長』に示される悲哀や詠嘆、「義朝」や「為義父子」の悲劇に対しての悲哀感は、『為朝』に示される共感的態度と相反するものであった。敗れる側から、しかもその中に英雄を仕立てて出発した作者の内面に、亡びなければならなかった「新院」や「左大臣頼長」に対する詠嘆があるのであり、古い時代の人間への挽歌をうたう一面が存したのである。もちろん、「為義一門」の悲劇に対する悲哀は、「新院」や「頼長」に示されるそれと同質であるのではなく、

挽歌としてよりは、新しい時代を告げる、庶民の期待を担った人間に対しての悲哀であったのである。

これ等のことは、作者の内面的な自己矛盾であると考えられるのだが、しかしここで『保元』や『平治』が、『平家』ほどでないにしても、語られたということ、つまり「語りもの」であったということをお忘れてはならない。とりわけ、「為義一門」の悲劇の中には庶民的な、説教的な側面があつて、それはまた、「為朝」の英雄化を強める設定でもあり同時に、乱に対する批判となり、だから流布本に附加される初段の主張とともに、「語りもの」の性格がうち出されているのである。

ここで全体の構成上注意したいのは、仏教的因果思想についてである。保元・平治の乱、源平の乱に至る古代末期から中世形成期に至る時代は、まったくの動揺期であり、興亡の激しさはさまざま、現世が救い難い暗いものであり、来世を願う浄土教的な、末法思想は全国的なものであった。そして、そこに、「お告げ」「前兆」「暗示」などが考えられ、悲劇が因果として考えられる時代があった。浄土教が、この期に広まるのも、まったくこの時代的な特色として、うなずかれるものである。

従つて、この期の物語が、儒教的な色彩が濃く、因果観によって全てが統一されているのも時代的な特色として当然なことであつた。先に述べた『保元物語』の内面的矛盾は、こういう思想で統一されている傾向が強いと言つていいだろう。『保元』の流布本に見られる

それ易に曰く「天文を観て時変を察し、人文を観て天下を化成

す」といへり。

の主張は、乱全体に対する、自覚的意識的な批判であり、それはまた、儒教的なものであり、同時にその対句の並べ方は、「語りもの」としての一面を如実に示している。

『保元』も『平治』も、対立者敗北者の側から描かれているのは前に述べたが、結局は、「新院」の行動も、「頼長」の行動も、前世からの因果とされ、説教的な意味をもって批判され、「信頼」の行動は『平治』初段の主張から否定的なのは当然であつたけれども、『義朝』のそれはやはり保元の乱以来の因果なのであり、これ等は作品全体の構成に一貫性を欠くものとなるばかりか、問題の本質を見極めることなく、盛り上がり弱める意味を同時に持つことを否定できない。そして、そのことは『保元』により強く現われ、結末の類型化は、まったく退屈なものとなっている。

三

「鎮西八郎為朝」と「悪源太義平」が、『保元』『平治』物語それぞれの英雄であり、物語の縦を貫いての主人公となっていることは先に述べた。このことは、各々の物語の性格を知るうえに一つの手がかりを与えるものであり、作者像と、語りもの文芸の側面を示しているとも言えるのである。皇室内部の対立と、貴族間の勢力争いが、両乱の中心問題とされ、『保元』では、武力は景背的存在であつたのであり、乱の問題の主人公ではなかつたのであるし、『平治』でも、『保元』よりは一段表面化しているとはいへ、『信頼』『信西』に代表される、院政をめぐる貴族間の対立が一義的なものとしてとらえられている。けれども、一度戦いが開始される

と、実は第一の実力者は武士であり、貴族はまったくの無力さを、人々の前に露呈していくのであつた。『保元』における、武士に共感するものと、古代的なものの崩壊に詠嘆を示す作者の自己矛盾の姿勢を、このことが明らかにするし、ここに武士が英雄として扱われるゆえんがあつた。そして同時に、『保元』や『平治』が、『平家物語』ほど広くではないにしろ、語られたということを、合せ考えると、これ等「語り」を聞く人達が、そのような英雄に拍手を送つただろうし、だから『保元』流布本における「為朝」のような誇張がなされたわけだったのである。特に京都周辺の都市人が、こうした英雄に共感し、後に述べるが、文学のワクを越えるほどに誇張して作り上げられた英雄は、結局、摂関政治から院政へと続く古代末期政治の中で、権力にも近づけず、没落する大小貴族達や、搾取され続ける多くの下層階級の人々が、活躍する武士に拍手を送るべき時代的要素、つまり中世の萌芽を告げる英雄の行動に、自身の望みの全てを感じ、期待する時代であつたことが解せられるのである。そしてそれは、特に領主階級の人々の直接的な願いであつたわけである。

「為朝」や「義平」や、その他多くの無名の武士達が英雄として描かれ、受け入れられたのは、ほかならぬ時代的な、全国的な要求だつたと言ひ得るであらう。ここでは二人の英雄について考へたい。

「その長七尺に余りたれば―」

「矢束を引くこと十五束、弓は八尺五寸」

「かの刀八咫沙門の悪魔降伏の為に、忿怒の形を現はし給ふも

かくやと覚えて夥し。如何なる悪魔、行厄神も、面を向くべき様はなし。——略——馬の上、歩立、惣じて天を翔る翼、地を走る獣の、目をかけつるものを射留めずといふ事なし。将門・純友にも越え、貞任・宗任にもすぐれたり。上代例なく、末代にも有り難かるべき兵なり。」——保元——

「軍評定」に登場する「為朝」の姿は、先ず以上のように描かれている。そしてこのような誇張は流布本では、更に力が注がれている。

「夜討に如かず」という戦いについての進言が入れられず、かえって義朝にその先を越されるけれども、中巻を中心とした戦闘の場における「為朝」の活躍は、みごとにたなびいて、文字通り「行厄神はいざ知らず、誰かけ面を向くべき」ほどのものであった。

この英雄化に意味をもつ戦闘の描写は、また、これ迄の戦記文学がとうてい果し得なかった迫力を持っているのであり、『将門記』から『今昔物語』などに、或は俗語の駆使による力強さや、破格の変体漢文による積極性、平易な口ことばでの叙述に見るべきものはあったが、漢語を随所に交えた和漢淆交文によるこの描写には、はるかに及ばないものであった。

為朝が二十八騎、鎌田が三十騎、逃ぐるも追ふもここを限りと揉みに揉んで馳せければ、馬の足音、八大山も崩れかかる如し。為朝が怒れる声は又雷の鳴り落つるにも異ならず。——保元・中巻白河殿攻め落す事

御所中、陣の中、響きわたりて、義朝の甲の星七八射削りて、遙かに後なる宝莊殿院の門の扉の厚さ五六寸許りなるが、金物ぐくみに篋の中過ぎてぞ立つたりける。鎧はざっと割れてはら

りと落つ。兵どもはわつと騒ぎてあきれたり。下野守目もくれ心も乱れて、既に馬より落ちぬべかりけるを——保元、同前

「為朝」の活躍、弓勢などについては、このように描かれる。保元・平治の乱の勝利者であり、平家繁榮の主人公であった「清盛」さえが、「為朝」の守る「大炊の御門の西の門」へ押し寄せながら、「凄じき者の固めたる門へ寄せ当りぬるものかな」と急いで退散するのである。

こうした英雄の活躍にもかかわらず、戦いは、「夜討ち」の進言が入れられぬことが伏線の意をもち、結果は敗北に終るけれども、「為朝」の英雄化は続いていく。

下巻において、「為朝」が捕えられるのも、「重病日数積りて」いた時であったとされ、「死罪」をなだめられ「遠流」に処せられるのも、「今まである上は自然の天運と言つべし」として終ることはない。

流布本の誇張は更に大きく、その超人振りは、鬼力島に渡り、鬼を捕えるというものであって、「追捕」の前で死してもそこには決して悲劇を感じることはない。

英雄が作られる要素は前に述べたが、物語の中である種の誇張がなされるのは当然ではあっても、それが過ぎると文学の意味が失われる。

「為朝」の英雄化にはかなり庶民的なつながりが感じられるし、愛すべき人間的な一面もある。しかしやはりその人間像にはリアリティはもろろなく、「為朝」の英雄化が乱の本質を見失わせ、作品全体の統一を失うというまったく逆の効果を生んでいることになる。

『保元』における武士の中心は、本来「義朝」であつたのではないかと思われる。そしてその「義朝」が充分描かれていないばかりか、戦いが始まると、「為朝」のような目ざましい働きを示す人間に興味に移り、中心がそこへ移つてしまつて、誇張に誇張を重ねるということになった。そしてこのことは、語側と「語り」を受入れる人々との間の働きかけの上になされたものであつたのである。

それにしても、この英雄に示される誇張は、文学としての機能以上のものであり、『保元物語』を、一面説話的なものに仕上げてしまった。『将門記』などからの発展は認められても、このことが、『保元』の文学的な弱体化に大きな意味をもつことは否定できないものである。

同じく英雄とされながら、「義平」にはかなり「為朝」と異質な面を認めなくてはならない。『平治』の最初の主張から、全体の構成で考えられるように、これと関連したものを有しているのである。「為朝」が「頼長」に、戦いについての進言を入れられず敗北するように、「義平」も「信頼」に拒否されて、結果が暗示され、物語の伏線になるのは同様である。更に急ぎの除目を「あざ笑つて」辞退するのも同じく描かれている。けれども「義平」の登場には「為朝」ほどの誇大されたものではなく、活躍のすばらしさも、物語からはみ出すことはない。そればかりか、ついには乱と無関係な存在とされる「為朝」とは違い、最後まで「義平」は戦いの責任を負つていく形で描き通されている。敵の攻撃の前で「わななき」、馬にも乗れない「不覚人信頼」に加担したことを悟り、それを悔いても、

戦いを捨てて無関係な超人にはならなかった。活躍が共感的に描かれるのは、「為朝」と違わないが、そこには一貫した作者の態度を見ることが出来る。

悪源太宣ひけるは、「この手の大將軍は何者ぞ。名乗れや聞かん。かく申すは——略一度々の合戦に一度も不覚の名を取らず。生年十九歳、見参せん」とて五百余騎の真中へ分け入り、西より東、北より南へ、縦横様蜘蛛手十文字に、敵をざつと蹴散らかして、つと駈け出で宣ひけるは、「端武者どもに目な懸けそ、罪作りに。大將軍重盛計りに目を懸けよ。櫓の匂ひの鏝に蝶の丸の裾金物、黄鶴毛の馬の乗り主こそ大將軍よ。押並べて組んで落ち手捕りにせよや者ども」と下知をす、——略一、大將軍重盛ばかりに目を懸けて組まん和大庭の椋の木の中にたて、左近の桜、右近の橘を五廻り六廻り七廻り八廻り、既に十度許りに及んで組まん組まんと駆けければ——平治、待賢門軍のこと

義朝見給ひ「わが子ながら悪源太はよく駆けつるものかな。あつ駆けたりあつ駆けたり」とて誉められける——平治、同前
こうした合戦の描写は、「義平」の活躍を、実にみごとに示しているばかりか、『保元』でそうだったように、この戦闘の描写は、一つの叙事詩を形成し得ていると言つてよいだろう。そして、これ等は多く『平家物語』に受け継がれる基礎を築き上げているのである。

「重盛」を追いつめて勝利にもう一步と迫りながら敗れる「義平」は、しかし最後まで「清盛」に対立して、戦いの責を負つて行動する姿に描かれていて、明らかに「為朝」とは異っている。

「為朝」と「義平」が共に『保元』・『平治』の英雄であったことは以上の通りであった。彼等の活躍が共感的に描かれるのも共通のものであった。けれども「為朝」の場合は、節度のない興が、誇張を著しいものにし、ついには説話的なものになり、『保元』を評価する時、かなりよけいなものとなってしまう。そのように為朝が形象される必然性があつたにせよ、それは『保元』全体の統一を欠く働きをしている。

「重盛」一人を切れなかつた「義平」は、追われて敗れるが、絶えず反平家の態度で統一され、同じ下巻での結末も、「為朝」のようにならぬ。一貫性が示されている。「為朝」と並べて考えるなら、そこには文学としての価値と発展が当然うなずかれるのであるし、作者像にも異質なものを考えないわけにはいかないだろう。

人々の欲求を代表するが如き英雄達の行動が、共感とかつさいの中に形成されたのは前に述べたが、ついには人間を越える「為朝」と、あくまでその欲求の中に行動していく「義平」との間には、初段の一つの主張の有無と関連して、意識されないものと、されたものととの違いが明らかに存在すると言つてよいだろう。

四

ここで、もう一つの『保元』と『平治』の異質な面について述べて終りたいと思う。

それは、英雄についての考察で、ちょっと述べたが、叙述の面についてである。戦いの描写が英雄化を強めると同時に、一つの叙事

詩を形成していることも前述したが、更に次の例についても考えてい。

「待賢門軍の事」―平治物語―における、「重盛」「義平」「堀河の戦い」で、それが終つたあとの、

「二人の侍なくば重盛も助かり難し。鎌田兵衛なくば悪源太も危くぞ見えられける。十二月二十七日巳の刻の事なるに、一村雨ざつとして、風は烈しく吹く間、物具氷りてたやすからず。の叙述。

同じ段における「三河守頼盛」と「八町次郎」の駆け合いを、京童これを見て、「あつぱれ太刀や、三河守もよく切り給ひけり。八町次郎もよく引きたり」とぞ咲ひける。と「京童」を登場させる仕方。

更に、先にも引用したが、「義平」の活躍振りを、父「義朝」がほめそやすことなどは、明らかに、その効果を意識して、一息入れ、或は目を転じさせ、立体的な雰囲気を作り出すことに成功して、『保元』よりの発展と考えるのである。

これ等の方法は、かなり用意され、意識された作者の態度であつて、初段の主張に引き継ぐ各所の批判など、まだ『保元』では摘出できないものであつた。

「光頼参内の事」の段で、「光頼卿」が「惟方卿」に問いたたすあの描写は、劇的な盛り上がりがあつて、次々とたたみ込むような会話は、緊張した空気を作り出すことに成功して、『保元』には見当らぬものである。

なるほどこれ等は、「部分的なものだ」とも言えるかも知れない。しかし読んだおもしろさという点でも、かなり差のあることに

氣付くし、『平治』は徹底して武力を認めることに統一されている。ただ『平治』下巻の記録的な叙述は、『保元』のような悲哀や詠嘆はないにしても、「物語」そのものには、つけたりの、無意味な叙述に終っているのは惜しいことである。

さて、以上『保元・平治物語』における一つの課題として、各々の発展や異質的な面の考察に終始してきた。

初めにも述べたように、二つの「物語」の構成には、多くの共通なものがあつた。相次ぐ二つの乱が、古代の終りを告げるものとなつて、その崩壊を担ったことになつた側から「物語」が語られていくことにも、明確な一つの主張の有無以外は似かよつていた。しかし今まで指摘した点においても、類型的でありながら、態度として描かれる、「為朝」と「義平」の人間像には、興味的なものと、統一されたものとの差があつて、それは「物語」の評価に関連する問題となることを示していたことは前述のとおりである。悲劇が因果とされる傾向は、どちらにも存在するけれども、しかしそのことは、『平家物語』では著しいものであり、むしろこのことは、作者の思想であると同時に、時代的な特徴として考えられなくてはならないことである。そして多くの悲劇が悲哀をもって語られる点に、「語りもの」の一面を考へることができが、それは決して同一なものではなく、まして『平治』では、作者の主張に照応して、古代的なものに対しての詠嘆はほとんどないといつてよいのである。もちろん

ん前出の永積氏が言われるように、「質的な転化」を、あらゆる面ととげているとは考えられないし、人物の設定、物語の骨子、武士に共感と期待する態度には、著作者の同一人的要素が多い。

けれども、今まで述べてきた諸点にかなりの発展があることは否めないし、それが、二つの『物語』の「質的な転化」と言い切れぬにしても、ほとんど同時代に形成されたと言ふことや、描写の類似、文献学的な不明確さ、などから、部分的であつても、質的な違いに素通りであつてはならないと思う。

とりわけこの期の散文文学の、ある種の限界を考へるとき、二つの『物語』が、作者の思想や、形象の仕方に違いがあるとしたら、その転化が、そう早急に可能であるかどうか、大變な疑問となるのである。

そこで残された問題は、文献学的な資料と研究であるが、今の私には今後の課題としなくてはならない。ただ、それはどうでもよいというのではもちろんなく、どちらが正しいか、正しくないかということよりも、戦記文学の頂点として、『平家物語』を考へるとき、『将門記』や『陸奥話記』、更に『保元』から『平治』へと、継承と発展を見ることができのだし、そして『保元・平治』の二つの中にさえ、『平家』につながる発展があるということを考へたいと思うのである。

今日まで数少ない『保元物語』・『平治物語』の研究が、改めてこの角度から考察されることを期待し、私の今後の課題ともしたいと思う。

(昭和三十三年本学日文科卒)